

J X T G 童話賞 選考委員の紹介

西本鶏介

昭和女子大学名誉教授。児童文学や児童文化に対する評論、作家・作品論、民話の研究、創作など幅広く活躍。絵本や民話の再話も多い。また坪田譲治文学賞、椋鳩十文学賞などの選考委員もつとめる。近刊の著書に「まよなかのたんじょうかい」（すずき出版）、「西本鶏介児童文学論コレクション（3巻）—巖谷小波文芸賞特別賞受賞—」（ポプラ社）などがある。

立原えりか

童話作家。「人魚のくつ」でデビュー。ユーキャンの「立原えりかの童話塾」塾長、広島アンデルセン、池袋コミュニティカレッジほかで童話創作教室の講師、創作童話の機関誌「ヒースランド」の編集長などをつとめる。代表作は「木馬がのった白い船」ほか、「うたってよ、わたしのために」（ポプラ社）、「あんず林のどろぼう」（岩崎書店）、詩集「あなたが好き」（大日本図書）、「王女の草冠」（愛育社）など。

角野栄子

童話作家。主な作品に「魔女の宅急便」（福音館書店）、「なぞなぞあそびうた」（のら書店）、「ネッシーのおむこさん」（金の星社）、「アッチ コッチ ソッチのちいさなおばけシリーズ」（ポプラ社）、「わたしのママはしずかさん」（偕成社）、「魔女からの手紙」、「ちいさな魔女からの手紙」（ともにポプラ社）、「ラストラン」「ナーダという名の少女」（角川書店）、近作に「トンネルの森 1945」（角川書店）、「キキに出会った人々」（福音館書店）などがある。

中井貴恵

女優・エッセイスト。数々の映画、ドラマに出演。現在は「大人と子供のための読みきかせの会」の代表をつとめる。2006年より様々なジャンルの音楽と朗読を合体させた朗読公演「音語り」にも精力的に取り組んでいる。「あらしのよるに」「きいろいばけつ」「ナゲキバト」「晩春」「秋日和」「東京物語」「秋刀魚の味」などを全国で公演中。エッセイスト、絵本翻訳家として著作物多数。

宮西達也

絵本作家。人形美術、グラフィックデザイナーを経て絵本をかきはじめる。主な作品に、「おまえうまそうだな」（ポプラ社）、「おとうさんはウルトラマン」「パパはウルトラセブン」（ともに学習研究社）、「ヘンテコリンおじさん」（講談社）、「きょうはなんてうんがいいんだろう」（鈴木出版）など多数。

薫くみこ

児童文学作家。高島屋の広告デザイナーを経て、児童文学、絵本、童話の創作を始める。主な作品に「十二歳の合い言葉—12歳シリーズ」（ポプラ社）、「あのときすきになったよ」（教育画劇）、「ハキちゃんの『はっぴょうします』」（佼成出版社）、「ちかちゃんのはじめてだらけ」（日本標準）、「なつのおうさま」（ポプラ社）、「みんなでんしゃー赤いでんしゃシリーズ」（ひさかたチャイルド）、近作に「げんきのみかたパンツちゃん」「だいすきのみかたパンツちゃん」（ポプラ社）など多数ある。

【西本先生からのメッセージ】

『J X T G 童話賞の基本的なテーマはあたたかな心のふれあいです。それさえ守っていただければどんな題材でもかまいません。大切なことは何を書くかではなく、いかに面白く書くかです。いちばんつまらないのは、だれでも思いつくような発想や描き方をした類型的な作品です。童話だからといって動物をやたらと擬人化したり、ファンタスティックなお話にする必要はありません。現実を舞台にした人間のお話だって、いくらでもすぐれた作品が書けるはずで。素朴であっても、いきいきと泣き笑いのできる作品、空想のできごとが本当のできごとのように思える作品、みずみずしい感性のイメージ豊かな作品、個性的でありながら誰もが共感できる童話、そんな童話を待っています。人を感動させるためには、みずから感動できる心が必要です。なにげない風景や人間の姿にも童話になるものはいくらでもあります。時にはじっくりと眺めてください。』

以上